



同志社人物誌 (41)

高橋元一郎

武 邦 保

迎えられない悲劇的な平和の思想であったとするならば、高橋元一郎の行動もまた、いづれどこか悲劇的で清美な詩であった。

二、生い立ち

彼は明治二八年（一八九五）二月六日、組合教会の牧師・高橋鷹蔵と妻・知登子の長男として、宮崎県高千穂の地で生まれた。そこは知登子の実姉の嫁いだ古閑武平（聖公会司祭の家）であった。

元一郎の父・鷹蔵は新潟県の出身で、明治二一年（一八八八）同志社学院神学部で学んでから、山鹿、柳川、宇和島、丸亀と伝道地を転任し、元一郎たち家族もこれについて歩いた。明治三五年（一九〇三）以後「明治」を省く——の晩秋、七歳の彼は母をその丸亀で失った。着任一ヶ月余のことであった。二人の弟、一人の妹がいた。

やがて年があらたまるや、彼ら父子たちは熊本草葉町教会へ移ってゆく。この教会で大江女学校（知登子の母校）の校長・竹崎順子（実学究・茶堂の妻）にめぐり会った。それが鷹蔵と幼ない元一郎にどのような転機を与えたかは、十分に計りえないが、横井小楠一族のも

「無名のヨハネ」

——平和主義者・高橋元一郎の生涯——

一、序

同志社の生んだ人物の中には数奇な運命を歩んだ人も少なくない。しかし、純真な天国への信仰、また隣人と現実国家への熱愛をも

って詩的人生を送りえた人、高橋元一郎（一八九五年—一九三四年）に並ぶ者はさほど多くはいないだろう。

彼の生涯を調べてゆくほどに、それが昭和初期の一揆的な国家改造主義者たちの姿にもなり、またはるか一世紀のヨルダン川に立つ異様な予言者の姿とも映るであろう。これらの姿に特徴的なるものが、その時代に安易に

つ進歩的な氣風が、高橋家に新風を吹き込んだことは考えられる。

元一郎には新しい母（ヨブ子）が来た。そして三八年（一九〇五）、父は小樽の組合教会に転進する。元一郎はそこで小学校を終え、四一年（一九〇八）小樽中学に入学するが、彼もまた翌年春（一九〇九）、父に願って同志社普通学校に転校する。その間、父は岡山県（美作）の教会、そして日韓合併（一九一〇）直後の朝鮮伝道へと赴いて行く。

大正三年（一九一四）、第一次世界大戦開始の年に元一郎は普通学校を卒業し、大学神学部予科に入学する。どこか神経質であったが普通学校では秀才仲間の山本宣治と交友を結んだ。師には三輪源造、加藤延年を仰いだ。

山本は生物学者となり、やがて無産者の社会運動を指揮して普選最初の労農党代議士に転進するが、このことは当時（昭和三年・一九二〇）朝鮮（大邸・たいきゅう・学院教養科目講師、岡山（美作落合組合教会主任伝道師）に職を得ていた元一郎の心を大きくゆさぶった。しかも、間もなく山本の遭難（三月六日）を牧師館で知った彼が、牧師を辞して上京し、無産者運動、平和運動に献身したことは、一般には奇

行でもあり、「良心の全身に充満した」詩人の飛躍であった。

三、同志社時代

話は何どるが、元一郎は神学部予科を二年で中退している。大正五年（一九一六）四月のことであった。中退の理由は明確ではないが、同窓の親友・森中章光氏によれば、ひとことで、わずらわしくなった、ということであった。それはなぜか。

時は第一次世界大戦の戦争景気による先進工業国の飛躍的發展（日本も）と軍事産業化への道がたどられはじめた。そして、銀行の金融資本制の支配が日本にも台頭し、軍と財閥が政治を支えてゆくという構造がはっきりとできあがってきた。そして、たとえば工場労働者も、一九一四年から五年間に、一万人から一八二万人と激増し、労働運動への盛り上がりもみられた。

すでに在京のユニテリアン派に属するキリスト者たちは、一九一二年に法学士・鈴木文治を中心に一五名の同志によって「友愛会」を結成していた。組織は年々拡大され、一九一五年以後はストライキの回数も大幅に増え

はじめ（一九一二年に四九件、一六年一〇八件、一七年三九八件）。国家は、独占資本に奉仕する労働力を確実・安全に保持するため、「工場法」（社会立法・一六年）を施行して、「民本主義」の思想に気を配りつつも、しだいに世界戦争の波長に政策を合わせていったのである。

高橋元一郎は神学生であることにある種のいらだちを感じていたに違いない。西寮の祈禱会で、日野真澄教授（当時神学部部長）を前に彼は「日本は世界の盲腸なり。同志社は日本の盲腸なり……依ってこれを切りとらざるべからず」という「同志社神学部に袂別を告ぐるの辞」を述べて、松籟の音が心底にまで届く静寂の「新島襄墓前」にひざまずき、祈ったという（本田清一「街頭の聖者・高橋元一郎」、昭和一年、関谷書店、四五―四七頁）。

このようにして彼は浪人の身となり、北山や白川の里に居を移して生活するが、そこでも新島の墓前に誓ったとおり伝道ははずせず、日曜学校を開いて、子供たちと遊んだ。詩人らしい一面ではないか。

そのころであつたらうか、彼は北原白秋に詩作の指揮を乞うて作品を送っている（森中章光氏談——これは後にそのまま返却されたとのこと

ある。そのうちに親しい神学生二人（永向啓次郎と森中章光）とともに寺町敷馬口の民家に同宿することになった。

そしてここが同志社の学生、生徒の「菓窟」ともいえるほどのサロンとなったのである。元一郎は自室にシオン（神の園）の名をつけ、とくに少年たちの出入りを歓迎した。田畑忍名譽教授もその一人であったという（森中談）。その後三人の宿は浄土寺に移るが、その年の秋（一九一六、恩師の一人、三輪源造（国語教師）の紹介で、図書館司書として奉職することになったのである。

同志社図書館は、明治二〇年（一八八七）以後、有終館に置かれたが、元一郎が就職した年の前年（一九一五）、今日「旧図書館」と呼ばれる建物（現在、大学体育課、アメリカ研究所、人文科学研究所等が置かれている。）の書庫が新築されたところであった。

翌年には入館者一万人（学生一、三七九名、蔵書三万七千余冊を数えた。その本館が開館したのは、さらにその翌年（大正七年・一九一八）であった。

原田助社長は、就任以来同志社を組織的にも強化する方向で努力され、これが図書館に

一つの実を結んだといえよう。いずれにしても、良き時代に元一郎は社員となった。そして館長荒木良造（国文学）からも慈愛を受け、生活をたて直した。しかし、原田社長にも後の海老名弾正総長にも、彼は生来の単純・正義の一念で対応した。

四、社会詩人の情念

元一郎の図書館勤務時代に、大きな人間の邂逅を賀川豊彦との間に経験した。賀川は大正六年（一九一七）帰国して神戸貧民窟や友愛会、日本基督教会で活躍を始めていた。おそらくその数年後であったろう。森中氏によれば、賀川が同志社の非常勤講師をしていた（有島武郎も一九二三年、近代文学を講じている。「九十年小史」、三五三頁）ころであったろう。

元一郎は学生たちとともに賀川の講筵こうぜんに触れたのである。

もちろん、今一つの出会いがあった。それは結婚を約した大野静江（女専英文科卒、朝鮮・公州の女学校教師となるが、今治に転任、病により西宮で永眠・一九二六年）との純愛について語りねばならない。しかし、今はそのことよりも、賀川に接した元一郎に人生の大きな転機が訪

れたことから書かねばならない。実に、賀川は幾多の同志社人（学生・教師）に社会化信仰の洗礼を授けていたのである。その一つが中島重教授たちの唱道した「社会的基督教」運動であったことも、やや後の時代であったが、ともに想起できるであろう。

さて、この中島や今中次磨など、本郷で大学と教会生活を海老名弾正の周辺で送った少壮の学者たちが同志社に来たころ、第一次大戦も終わって（一九一九、国際的にも国内的にも平和運動やマルクス主義が叫ばれ始めていた。政府はこれに対して弾圧政策で臨み、国民精神作興運動や治安維持法（一九二五）で対下の政策的構造が課せられたからであった。

元一郎の勤務する同志社も、学生運動を鎮静させるためでもあったか、大正一五年（一九二〇）より軍事教練が取り入れられたという（本田・前掲書、一〇一頁・九十年小史・一七八頁参照）。彼は、海老名総長に「銃剣をもって汚」される母校を憂い、荒木館長に辞表を出して一時上京してしまつた。

大野静江と天国での再会を約して別れたのもこの年であった。やがて、父も働き、静江

も働いた朝鮮（天邸）へ赴き、前述したように山本宣治の動向にあらためて触発されるのである。平和主義を唱えることがすべての解決に通ずる唯一の王道であることを心底から知らされるのも、その後まもなくであった。

昭和三年（一九二八）岡山の美作落合キリスト教会牧師となつて朝鮮より帰還した彼が、一ヶ月後の四月に、「山宣のあだ討」（森中・慇）といつて牧師を辞して再び上京した頃、京都大学でも河上肇教授がその大学を辞している。一つの時代であった。元一郎にも河上にも刑事の目が光っていたことは事実であらう。

上京の途上、高橋元一郎は母校にしばらく道草をして、聖十字団と名づけた旗を旧神学館（テラー記念館）のあたりに立て、校内のゴミを丁寧に拾ひ始めていた。それは、図書館で働いていたころ、校内の美化の運動をして、そこにキリストが人々の罪をすすんで拾ひ集めているという十字架の愛を実感した体験に基づいていた。

宗教詩人のささやかな行でもあったであろう。そして、これらがすべて「他人の尻をふく」という賀川の贖罪愛の実践に殉じていっ

た元一郎をつくるのである。

彼は、賀川の手になった本所キリスト教産業青年会（日本では初期のキリスト教労働者伝道に働く北川信芳を頼つての上京をして、日雇い労働者たちの厚生面の仕事を、彼自身もその日暮らしのボランティアとして開始した。宿の世話がたいへんであった。

賀川豊彦は、ちょうどそのころ（一九二九、東京市長・堀切善次郎に専任の社会局長となるよう求められ、囑託としてそのイスにすわっていた。これは元一郎の活動にも大きなプラスであった。

ある時は宿を仮設するため、市から天幕を借用するということもあった（采田、前掲書、一〇八頁）。彼はテントに寝ることもあったが、肺病の再発などあって、賀川ハル（豊彦の妻）の世話になり、松沢に仮住まいをしたりしていた。

結びに代えて

高橋元一郎の平和主義は、狭い政治主義的イデオロギーで貫かれていたのではない。それは、安眠するに場所のない無産労働者たちが、身心ともに豊かに暮らせるような社会

機構を、地上においても、天国においてもつくることであった。ここに元一郎の「平和論」をかいま見ることが出来る。天国にも生きる徹底的平和論である。

しかも、彼が満州事変（一九三二）を日本の軍国主義化（国家的罪悪、本田、前掲書、二五六―七頁）の決定的な転機として厳しくとらえていることを評価したい。松沢教会で非戦平和の祈りを真剣にはじめるのも、このころであった。また、それは思ひつきのようであったが、「クリスチャン平和連盟」を提案し、軍縮・日華親交・国際連盟支持の三原則を関係者に文書で訴えている。

また、同志社と非戦思想との共感で柏木義円と交信し、柏木の「上毛教会月報」をして平和主義のジャーナリズムとすべく、たとえ「世界軍縮会議につきても、どうぞ貴紙により教育して下さい」（柏木宛書簡、一九三二年三月二日付、柏木清子氏所蔵）と書き送っているほどである。（この手紙の余白には、柏木の筆と思われる朱字で、『日本が第二ノ独逸トナラヌ様』と加えられている。）

しかもその年（昭和七年・一九三二）は、二・二六事件が起こっていた。ここに彼の純な平

和熱が、柏木先輩に向かって詩となつてほとばしり出たのも、また自然である。

「野の声」

高橋元一郎

時、世は暗く道失せて
国民怖れまどうとき、
またたきそめぬ曙の星
荒野に叫ぶ 人の声

洗礼ヨハネは身にも皮

いなご、野密を食となし、
ヨルダン河のそばに立ち
主の道筋を直くせり、

いで国民よ 罪を悔い、

天地の神に立ちかえれ

清き生活を求めかし

腹のすそよ罪を悔い——

(後略)

(一九三二・五・三〇付、同上)

どこか新島襄に似て黒い目をしていた(森中・魅この平和の詩人は、また「幾久しく同志社に生き、同志社に死んで下さい。……

『善かつ忠なる僕』は。」「同志社校友同窓会報」、二三号、一九二八・七・一五発行、九頁」と、恩師(加藤延年)の遺影に向かって叫ぶ同志社の野人・ヨハネであった。

その最後もまた、山室軍平らに見守られてどこか壮烈であったという。ドイツにナチス台頭の年であった。(女子大学教授・聖書)

注、本文中(二九頁)の北川信秀氏より筆者あての書簡(一九七八・二・二〇付)には次のようにある。

「高橋元一郎さん、こと同志社の図書館(大正末期から昭和の始め)司書時代までは、中心を京都においていたようです。

お父さんは牧師さんで、朝鮮伝道の日本人として開拓者の一人です。旧組合派の牧師で同志社の先輩。

昭和の初期に賀川先生を尋ねて上京され、助手として受けいられ活動。貧しい人々のお世話をすることを仕事として、ルンペン、失業者の無料宿泊所々長(賀川個人経営のもの)をしていて、肺病になり、賀川家に戻り、静養中、重くなって救世軍の杉並療養所に入院申召天、賀川先生、山室軍平先生も、度々、見舞われていた。「召天 高橋元一郎」の自筆を枕元に書き残して一人静かに召天していった。祝福された人でした。賀川先生の教会にて葬儀もあって、至極盛大。病氣中、賀川夫人、私共が世話をしました。私は

個人的な親友。

一、高橋元一郎著

「世界のことも」(平和読本)

一、親泊康永著

「一杯の水」(高橋元一郎伝)

一、本田清一著

「高橋元一郎先生」

以上

【近刊紹介】

『回顧七十七年』(大塚節治著)

B 6判 六、〇〇〇円

大塚節治先生回顧録刊行会発行

(取扱・同朋舎、校友会)

『続・同志社歳時記』

(生島吉造・松井全共編)

B 6判 七〇〇円

同志社大学出版部発行

(取扱・同志社収益事業課)

『同志社校友会名簿—昭和五十二年度版』

(同志社校友会編)

B 5判 一〇、〇〇〇円

同志社校友会発行

(取扱・校友会本部、各支部)